

顔をふみつけられて

教護院・県立二豊学園で起こった事件はあまりにも傷ましい。教師が生徒をなぐり骨折させ、顔まで踏みつけている。わずか十歳の子に対してである（本紙八月十三日）。

教護院とは非行の子らを愛を中心に教育保護する所であるのに、正反対のことがなされていくことは許せない。恐るべき場所だ。

教師の暴力は子らに恐怖と憎悪と反抗復讐みくしゅう心をさらに強め、いつそう非行へ追いつたただけである。教護院に強制的に入れられる子らは、不幸な環境下の被害者である。さらに不幸に陥れるのか。それが見えない教師たちは急ぎこを去るべきである。教師―「こんなやつ、この世におらんとすつきりするだろう」すると子ら―「こんな教師最低、もっと困らしてやれ」。教師はなぐる。生徒は仕返す。それでは荒廃への道しかないではないか。

教護の仕事ほど困難なものはないが、本道はただ一つ。園長を中心に職員全員が汗

を流す生活を本気ですることだ。子らがその生活についてこないはずはない。愛とは流汗の実践。流汗の働きをすれば大事なことがつきつきと見えてくる。家庭も同じ。スポーツでたしかに学園は汗を流している。そんな汗は汗のうちに入らない。しよせん遊びだから。ものを栽培し、家畜を育てる生産の生活に汗するのでなければ。

たしかに今の学園にそんな生産的教育環境は全くない。広い自然と教育を生きる人材を用意しなければならぬ。問題は県自体にその識見が皆無であることだ。

(一九九二年九月二十九日)